宗岡二中だより　10月号

令和5年10月２日

自ら学び考える生徒
学校教育目標：心豊かな優しい生徒
明るく元気な生徒

初心不可忘

～初心忘るべからず～

校長　伊藤大輔

令和5年度も、まもなく中間地点に差しかかるところです。長期予報によれば10月に入ってもなお、暑い日が続くようです。加えて、コロナやインフルエンザ等の流行も予断を許さない状況です。各自で体調に気を配って、残りの学校生活を健康で前向きに過ごしてほしいです。

先月は3年生の修学旅行に同行し、奈良・京都に漂う厳格な雰囲気を堪能しました。宗二中を支えてきた3年生とともに、古きをたずねる中にあって、思い浮かんだのが「初心忘るべからず」という言葉です。新人大会に向けた壮行会で1・2年生にも紹介した言葉です。

この言葉を残した世阿弥（ぜあみ）は、西暦1300年代の後半、室町時代の始めごろ、現在の「能」という芸術を形作った人物です。「初心忘るべからず」は、芸の上達に励む弟子たちだけに授けた秘伝の書に記されています。年の初めや人生の節目でよく耳にする言葉だと思います。そして「最初の決意・目標を忘れてはならない」という意味で使われることが多いようです。しかし、この言葉の成り立ちを探ると新たな発見があります。この言葉には続きがあります。次のように書かれています。

「しかれば当流に万能一徳の一句あり。 初心忘るべからず。この句、三ヶ条の口伝あり。是非の初心忘るべからず。時々の初心忘るべからず。老後の初心忘るべからず。この三、よくよく口伝すべし」

（世阿弥『花鏡』より）

波線で示した箇所に「初心」が三度出てきます。それぞれ簡単に紹介します。

「是非（ぜひ）の初心」とは「初めのころ、自分はどれだけ下手だったか、どれだけ未熟だったか。そのことを忘れてはならない。」という意味です。なぜなら、自分がどれだけ上達したか、成長したかを顧（かえり）みるときの拠り所は最初のころの下手だった自分だからです。未熟だった自分の姿を基準に、いま現在の自分を見つめる心の眼をもて、と慢心（まんしん）を戒めているのです。

「時々（ときどき）の初心」とは「それぞれの時期に経験した新鮮な気持ちや未熟さへの葛藤などを心にとどめておけ」という意味です。習い事でも部活でも初めは基本を教わらなければ何もできません。ところが数か月、数年と続けていくうちに基本を覚えるだけでなく、こうしたときにはこうすればいいと自分で考えられるようになります。すると今度は後輩に教える立場になります。しかし、教えるのは初めての経験ですのでいろいろ戸惑います。部活で部長などの役職につけば、なおさら新しいことに挑まねばなりません。このとき、「それまでの自分」が積み重なることを忘れずに、その上に立って自分を更新していくことが肝心だと教えているのです。

「老後（おいてのち）の初心」とは「歳をとっても、その年齢ならではの初めてがある。いくつになっても初めてやることには、初めての未熟さがある。」という意味です。裏を返せば、より高みを目指そうという気持ちがあれば、それは何歳であろうと成長できる、という考え方です。非常に勇気の湧くものの捉え方だと思います。

我々は生きている限り、今まで体験したことのない新しい事態、あるいは厳しい試練に直面するものです。そのとき、うろたえていても事態は好転しません。世阿弥が遺した初心にまつわるメッセージは「ここぞ！」という局面でこそ活かしたい思想です。未熟であった頃の自分を振り返るだけでなく、今ここにいる自分も「未熟」な状態であると自覚しなさい、との教えなのです。およそ600年受け継がれてきた「初心忘るべからず」。本年度も中盤を迎える今こそ自分の在り方に向き合う指標にしてみてはいかがでしょうか？

さて、今月18日（水）本校は開校42年を迎えます。校長室に「校章の原画と由来」が掲示されています。まさに今読んでくださっている「宗岡二中だより」の左上に配置されている校章のことです。ここには「生徒にとって最も基本である『読む事、書く事』を『ペンと本』で表現しました。ペンを鳥の頭に、本を開いた形を羽根に見立てて、未来に向かって大きく羽ばたく様をシンボル化しました。」とあります。学ぶ力を蓄えて、未来を切り拓けという発案者の思いを感じます。そして「ペンと本」が象徴する学ぶ力が起動する第一条件こそ「私は未熟だ。まだまだ学び足りない。」と自覚することだと私は思います。